

第二章 本支店の増改築

一 平和島配送センター新設

書籍を中心とする当社の輸入品は年々増加するばかりで、従来の第四丸善ビルでは、甚しく狭隘となってきた。その上に都内、殊に都心地域の交通渋滞も影響して受注商品の配送にも遅延が生じがちであった。これは当社ばかりの問題でもなかった。たまたま品川沿岸から大井・大森一帯の海浜を埋立てた地域でまだ何等の構築物もなかった京浜2区（大井・大森の海岸）を輸入品の集積場にし、必要に応じて倉出しすることにしたならばということになって、司社長は、まず「隗より始めよ」でその一区劃を買いとって、そこに当社の配送センターを新設することにした。

この平和島の配送センター設置の件は、昭和四十三年八月五日の臨時取締役会で異議なく可決された。決定早々実施に移し、次の通り完成を見た。

所在地 東京都大田区平和島五丁目七ノ一

構造 鉄筋コンクリート造陸屋根地上四階塔屋一階

建築延面積 七、七七六・一三平方メートル（二、三五二・二八坪）



平和島配送センター

工事費 二億八、五四〇万円

着工 昭和四十三年八月七日

竣工 昭和四十四年五月三十一日

工事は、清水建設によって施工せられた。

ここには書籍・文具・事務機械などを集積するため、できる限り機械力・動力を使用し、直接的な人力を能う限り節約するように設備を施した。同時に一階倉庫の開放部の上部にはプロパンガスを使ったヒーターを取りつけて冬季寒風を遮断する設備をした点など勤務者の労苦を少しでも減じる工夫もした。

とにかく配送センターの新設によって第四丸善ビルの洋書倉庫がここに吸収されただけでなく、貨物一切の出入庫能力が非常に高まった。

同様の必要から、昭和四十六年十二月、京阪神地域の配送センターとして、総工費一億九千万円を投じて大阪府茨木市大字郡三八六番地に、鉄筋コンクリート造五階建、延面積四、八二五・一〇平方メートル（一、四五九・七坪）の配送センターを新築した。なお、その敷地内に鉄筋コンクリート造二階建二〇七・〇四平方メートル（六二・六

三坪）の厚生棟を新築、社員の厚生施設に当てた。

二 支店の増改築

(一) 京都支店の新築



京 都 支 店

戦災を免れはしたが京都河原町通りの京都支店は戦後ずっと木造二階建てであった。この建物は昭和十五年十二月、三条通りから移転する際鉄筋コンクリート四階建ての計画であったが、戦時法令のために工事を中断、変更せざるを得なかったのである。戦後当然改築の必要を認めていたが、本社及び罹災支店の再建や、新支店社屋の新築におわれてそのままの状態であった。漸く、罹災支店の整備も一応終わったので、昭和四十四年八月その新築を決定したのである。

これに先立ち、京都トラス株式会社所有の京都市中京区烏丸通二条上ル蒔屋町二五九番地所在、鉄筋コンクリート造地下一階・地

上三階建店舗延六一三・八平方メートル（一八五・六七坪）、木造瓦葺二階建住宅延二二六・七一平方メートル（六八・五八坪）を、昭和四十一年五月一日から翌四十二年六月三十日まで、賃借の契約を結び、これを仮営業所とした。

さて、京都支店の工事は二階に喫茶コーナを新設するなど当初の予定を拡大したが、昭和四十二年八月十六日、鉄筋コンクリート造の地上六階・地下一階の新社屋が竣工した。延面積三、八二七・二二平方メートル（一、一五七・七七坪）で、旧店舗の約二・七倍、売場面積は約三倍となった。総工費二億二、三〇〇万円を要し、施工は清水建設大阪支店であった。

（二）札幌支店の増改築

京都支店の新築が完了間近になると、つづいて札幌支店の増改築を行うことにした。札幌支店が現在地に地上五階・地下一階の新社屋を建築したのは、昭和二十九年六月であった。この度は子会社の丸善製品販売株式会社や発送、食堂、倉庫等に使用していた社屋の裏側の木造二階建二棟を取り壊し、その敷地に地下一階・地上五階を増築して本屋の各階及地階の面積を拡張、更に塔屋二階を増築した。その結果として、札幌支店の面積は延面積三、八〇一・〇八平方メートル（一、一四九・八二坪）となった。工事着手は、昭和四十二年五月十日、完成は同年十二月十日で、総工費一億三千万円、工事施工は、清水建設北海道支店であった。

（三）広島支店増築

昭和三十六年四月七日広島出張所は広島支店に昇格、鉄筋コンクリート造三階建の新店舗を開店したことは前述

した。その当時、すでに将来の発展に備えて基礎工事は四階建に堪えるようにしてあった。予想通り業務が発展して来たので、昭和四十三年四月三十日の臨時取締役会で、広島支店一・二・四階増築及エレベーター新設工事を決定した。工事は、広島建設広島支店の施工、昭和四十三年六月一日着工、同年十二月十日完了した。工費は四千万円であった。この増築によって広島支店の延面積は、一、七六〇・一九八平方メートル（五三二・四六坪）となった。

第三章 重役陣の異動と機構の改革

一 取締役の異動

昭和四十一年の重役陣は、次の通りであった。

取締役社長 司 忠、常務取締役 永井弥惣兵衛、飯泉新吾、取締役 渡辺英夫、上田憲治、草間省二良、石井茂夫、小林義正、中田正雄、足田宇三郎、監査役 井野礼二、三次健太郎

昭和四十三年三月二十五日、取締役中田正雄は常務取締役に選任され、これによって常務取締役は、永井弥惣兵衛、飯泉新吾、中田正雄の三名となった。また同日、取締役草間省二良は任期満了退任し、代りに小林俊亮、桜井喜代志が、新たに取締役に選ばれた。

小林俊亮は、明治三十四年三月二十二日生、大正九年四月入社、以後順次に各要職を経て、昭和三十五年十二月外国雑誌部長、昭和四十年九月人事部長となった。取締役就任後も人事部長を兼ねた。

桜井喜代志は、明治三十六年七月一日生、大正五年四月入社、以後主として洋書部門を勤務して、昭和二十九年四月洋書仕入部長に、昭和四十三年三月輸出部長となり、取締役就任後も輸出部長を兼ねた。

昭和四十四年九月二十五日、永井弥惣兵衛は病気のため常務取締役に退任、代って上田憲治が常務取締役に選任